

猿新聞

編集責任者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：220部
つつじが丘：440部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：20部

中山間地域農業の今後

今後、人口減少の進展に伴い耕作放棄地の増加、森林の荒廃などにより、鳥獣害問題が更に激化するものと考えられます。
農・林業の担い手の大幅の減少など日本農林業を取り巻く現状は厳しいものがあります。

中山間地域は、我が国の経営耕地面積の4割を占め、日本農業の中で重要な地位を占めてきましたが、生産条件の不利などから、農業を担う若者の都市への人口流出に歯止めがかからず、営農生産活動の停滞は無論、地域社会の維持すら困難になるという状況で、70歳代の人が更に上の年代を支えて集落を守っているというのが現状です。



拡大する耕作放棄地
名張市赤目町にて

中山間地域では、営農そのものよりも農地の維持・管理が困難になりつつあります。先祖伝来の農地を荒らすことが出来ないという概念から「無料でも

に低く貰い手もないというのが実状です。日本全体が人口減少社会に突入した中で、中山間地域での営農は現在よりも、過疎化・高齢化、農地の荒廃化が進展し、さらに難しい局面を迎えます。国は「地方創生なくして日本の未来はない」をモットーに地方創生政策を推進しています。が、中山間地域農業の危機的な状況を打開するための明確な施策は何一つ示されていません。

この中山間地域の窮状に迫打ちをかけるのが鳥獣害です。中山間地域は鳥獣害の最前線。鳥獣害は農作物被害にとどまらず、農業者の営農意欲を低下させることにより、耕作放棄地増加の一因ともなっています。同時に耕作放棄地の増加がさらなる鳥獣害を招くという悪循環を生じさせており、被害額として数字に表

れる以上の被害が生じていて離農に至る農家も増加傾向にあります。被害内容も農作物食害だけでなく、道路や溜め池の堤防損壊など生活基盤や、人身事故、交通事故にまで及んできております。何故、鳥獣害がここまで深刻化したのでしょうか。色々な要因が考えられますが、その全てが過去から現在の人間活動に対する自然からの報復なのです。私たちは100年前、



名張市では、野生動物が生息地する原生林を開いて大規模な宅地造成事業が始まった。(名張市桔梗が丘s38年頃)

今や生態系は、野生動物の異常増加を抑える機能までも失っています。一時期、狩猟者がその役割の一部を担って鳥獣を減少させてきましたが、昭和30年代から狩猟者の減少や高齢化のため狩猟圧が低下し野生鳥獣は増加の一途とたどっています。狩猟者の減少のように、鳥獣対策においても労働力不足が大きな障害になると考えられることから、効率的な鳥獣対策技術の普及を図るとともに、防護柵の重要性を周知する必要があるとあります。

特に維持管理のし易い防護柵の設置ルートを決定することと、地域住民が主体となった維持管理体制の構築が重要です。獣害対策の今後を考える時、当面の被害防除や個体数調整の努力はもちろん必要ですが、急激な変化を避けながら、いかに森林や動物と上手につき合っていくべきなのか、過去に学びながら長期的な視点で考えていくことが重要になります。

猛暑と夏野菜

ニホンザルは本州北限の下北半島でも生活出来る寒さにはめっぽう強い動物ですが、暑さにはとても弱い動物です。ニホンザル(以下サルと表記)には体温を外に逃がす発汗という体温調節機能が備わってなく夏場は大の苦手で夏場の涼しい早朝が餌を求めて動きが活発になる時間帯となります。これはサルに限らず夏場の早朝は全ての野生動物の動きが活発になる時間帯です。



ジャガイモ、タマネギ全滅
名張市中知山

し、数を減らす種も出るかも知れません。さて、前置きが長くなりましたが夏野菜のことは果実を食べる野菜のことで、トマトやナス、キュウリ、ピーマンなど)近年、日本全

を覚えたサルが増加しています。特に近年、農作物は甘くなっていることがサルが農作物に固執する原因ともいえます。サルの食性には地域差がありますが、サトイモやコンニャクは食べません。タカノツメやピーマンも苦手です。シソといったハーブ類も避けることがわかってきます。サルは目で獲物を探す視覚動物なので、比較的好まないサトイモやコンニャクを外側に、本命の作物を内側で栽培するという目隠し栽培が効果があります。

発汗での体温調整機能があるのはヒトとウマだけらしいです。記録的な猛暑が度重なる、体温調整機能のない野生動物にとっては大きな影響を及ぼすこととあります。

季節です。野菜はどの時間に収穫すべきなのかは、野菜の種類や季節によって大きく変わりますが、夏野菜の果菜類に関しては朝取りのほうが栄養価も旨みも高いという事です。(果菜類

通常サルは、明るい時間帯に行動し、主に早朝と夕方に採食をします。だが、猛暑が続く近年では、まだ明けやらぬ早朝が菜食のピークになっていて、寝坊した農家がタツチの差に被害に遭うことが往々にしてあります。

サル対策には根気が必要です。人間がどんなに知恵を絞っても、サルは人間が思ってもみない方法で畑を荒らします。イタチごっこに思えるかもしれませんが、諦めないことが重要で、諦めてしまつたら、次世代にまでサルの災いを残すことになりま

《お知らせ》

名張市では有害捕獲を下記の通り実施いたします。
《記》
期間：平成31年4月14日～令和元年10月13日
但し、動物愛護週間9月20日～9月26日は自粛します。
区域：名張市全域
目的：農林業被害防止・内水面漁業被害防止。
対象獣並びに数量：ニホンジカ(400頭)イノシシ(130頭)但し幼獣は除く。
☆猟期中に農作業や観光などで山中に立ち入る際には、十分注意をし、目立つ服装にするなどの対策をお願いします。また、檻や罠付近には近づかないようにして下さい。特にモンキーDOGオーナーさんには注意をお願いします。
【名張鳥獣害問題連絡会】

近頃では農作物の味

なりま



チョットー服

サルは夏場は苦手

ニホンザルは本州北限の下北半島でも生活出来る寒さにはめっぼう強い動物ですが、暑さにはとても弱い動物です。ニホンザルには体温を外に逃す発汗という体温調節機能が備わっていません。猛暑が続く近年では、まだ明けやらぬ早朝が菜食のピークになっています。

サルのポケット

サルは洋服を着ませんのでポケットはありませんが、手にいれた食物を大切に仕舞う入れ物は持っています。それが「ほぼぐろ」です。サルのアゴの両

側に袋があり、食べ物を詰め込んでおくことができます。餌にありつくと、できるだけ口の中にほおぼります。そして内ポケットともいべきこの「ほぼぐろ」に入れておき、あとで口の中に押し出してゆっくりと食べます。

尻ダコ

サルにはお尻に硬いタコがあり、木の枝や岩の上に座るときに上手に利用します。このタコは生まれつきあるのですが、成長するにつれてだんだん硬く、丈夫になっていきます。携帯用座ぶとんというところでしょうか。



名張市赤目街竜神山にて平成25年撮影

らいたの高さがある植物しか食べることが出来ません。これがノウサギなど小動物が減っている原因です。ノウサギなどが減ると、それと餌としている猛禽類にも影響が

シカ対策には特効薬はありません

シカはウシと同じ反芻動物です。様々な植物をエサにし、その種類は千を超え、イネの葉は好物です。樹木の皮なども食害します。シカによる森林被害は森林が持つ公益的機能や生態系にまで、その影響が及びます。写真で林の中がスッキリして遠くまで見渡

せるのが、おわかりいただけるかと思えますが、これはシカのせいでも、樹木の皮は剥がされ、林床の植物が食べ尽くされてしまっているためです。背の高いシカは、地上から2メートル近い高さまでの植物を食べます。一方、小さなノウサギなどは、せいぜい地上から50センチ

及びことで、結果として生態系のバランスが大きく崩れてしまうことになるわけですが、シカは、この20年間で約9倍に増えたといわれています。シカによる被害が深刻化しています。かつては里山だけでなく、さらに奥深い山にまで炭焼きや、きこり、猟師などが出入りして野生動物にとっては、その人圧が脅威で人里には降りてこられなかったのです。また、狩猟を生業とする猟師も多く、個体数の調整も自然に行われていたと思われ

ます。増えすぎた野生動物の捕獲調整が求められています。狩猟人口は激減、ベテランの猟師の高齢化などで、狩猟による個体数調整は困難な状態です。原生林の広がる奈良県大台ヶ原では、伊勢湾台風で樹木が倒れた後に草原ができ、シカが大繁殖して03年には

生息密度が1平方キロメートル当たり41・6頭と適正密度の十数倍になったことがありま。地域に合わせた地道な対策が功を奏し16年度の密度は1平方キロメートル当たり5・9頭になり、植生が回復しつつあるそうです。野生動物たちが近づかない集落をつくるには、獣たちを引き付ける全ての要因を、一つずつ改善していくことが必要です。

農家は、収入となる農作物被害には敏感に被害者意識を持つが、お金にならない作物を食べられても見て見ぬ振りをして鷹揚に構えています。これが獣害が収まらない一つの要因になっているようにも考えられます。

シカによる農作物被害は平成29年度が約55億円やや減少といわれていますが、小規模な被害や家庭菜園被害、林業地の食害や皮剥ぎ被害も表に出づらく実態は表れている数字の5倍という推定もあります。

獣害対策は、野生動物の生態を知り、地域の特性に合った対策を地道に継続することでその効果が上がります。「獣害に特効薬はありません」地域の特性に合わせた対策を地道に積み上げていくこそが、効果をあげる手段となります。

サルの遊動域と地域的植生は密接な関係があります。名張A群は毎年、初夏から盛夏にかけて青蓮寺湖周辺に群生する桑の実や、ひなち湖周辺のアカシアの花に集中して、遊動パターンを大きく変えています。移動図に示すように現在ではひなち湖や青蓮寺湖周辺に群れの全

サル情報



初夏から盛夏は出産や子育ての時期で群れ全体が興奮状態で、食欲も旺盛になっています。農作物には特に警戒が必要な季節です。つつじが丘のハナレザルが行方不明のこのですが、本来、ハナレザルは他の群れに入るとい目的を持って移動しているサルです。普段見かけない場所でサルを目撃した場合、ハナレザルの可能性がありますが、悪さをしない限り、興奮させたりしないで放っておけば、いずれ立ち去ると思っておくべきです。但し、餌やりは厳禁です！

移動図に示すように現在ではひなち湖や青蓮寺湖周辺に群れの全

